

チェルノブイリの子どもたち



チェルノブイリ子ども基金 NEWS No. 104 2016年6月18日発行

チェルノブイリ 30 年・福島 5 年救援キャンペーン 小出裕章講演会 & チャリティコンサート 吉原りえ(フルート)・新垣隆(ピアノ)



4/23 (金) 練馬文化センターで開催のイベントは、定員 592 名のホールはほぼ満席となりました。また、同日会場内のギャラリーで開催の「広河隆一チェルノブイリ写真展」には約 130 名の来場者がありました。ご来場いただいたみなさま、宣伝や当日ボランティアにご協力いただいたみなさま、ほんとうにありがとうございました。小出裕章さんの講演録は p.3-12 をご覧ください。



<講演会・コンサート来場者の感想>

◆素晴らしい演奏と貴重なお話をありがとうございました。一刻も早く、福島の子どもたちに対策をとらなければならないと思います。(40 代女性) ◆様々な現実、未来について考えさせられた。次は行動する番かと。(50 代男性) ◆小出先生の話はよかった。(10 代女性) ◆コンサートはとても心地よく音楽の力を感じた。小出さんのお話は分かりやすく、今までよく知らなかった数字的な視点から理解ができた。私は大学で保育を学んでいるので「子どもたち」という言葉に心をゆさぶられた。子どもが子どもらしく生きる権利を奪われた出来事であったのだと感じる。事故当時は子どもでしたが、これからは子どもを守る責任のある大人の一人として向き合っていかなければと思う。(20 代女性)

<写真展来場者の感想>

◆生きるために、水を飲まなければならない、食べなければならない、母乳をあたえなければならない。どんな苦しい選択かと思うと涙が出る。責任のとれない事は、今すぐやめるべき。(40 代女性) ◆写真の中の素顔が胸に突きささった。日本の福島の問題も、過去の歴史を学んで、間違った方向に行かないように働きかけないとならない。(30 代女性) ◆たとえ事故がなくても「核のゴミ」をどうするか、難しい問題だと思うが、自分の子や孫やその先の子孫たちに絶対残したくはない。(50 代)

⇒来場者の感想、続きは p.13 をご覧ください。

募金振込口座のご案内：最終頁<事務局から>もご覧ください。

●郵便振替口座 00160-4-98316 「チェルノブイリ子ども基金」

●三菱東京 UFJ 銀行 新宿中央支店 (469) 普通 1688367 「チェルノブイリ子ども基金」



4/23 イベントにご来場いただいたみなさま、ほんとうにありがとうございました。当日は 36 名ものボランティアのご参加がありました。受付、書籍等の販売、案内係などお手伝いいただきました。練馬区内の市民団体や個人のみなさまには、宣伝やチケット販売のご協力、また当日ボランティアにもご参加いただきました。今回、事務局が練馬区に移転してから初めて同区内でのイベント開催でしたため、大変ありがたく、心強かったです。チラシ・ポスターの宣伝には、多くのみなさまにご協力をいただき、大変感謝いたします。そしてこのイベントにご出演くださった 小出裕章さん、吉原りえさん、新垣隆さんに心よりお礼を申し上げます（子ども基金事務局）

“子どもたちに保養を！”

チェルノブイリと福島の子どものために、いつもあたたかいご支援をありがとうございます。

私がチェルノブイリ救援活動に関わるようになったのは事故から 5 年目の 1991 年、ちょうど、福島原発震災から 5 年目の今と同じ時期でした。まさか、自分の国でこのような原発事故が起きようとは、当時はもちろん夢にも思いませんでした。埼玉県内で「チェルノブイリと核の大地広河隆一写真展事務局」（現在は津市）を立ち上げたのが 1991 年の春。そして秋には、チェルノブイリ子ども基金（東京）の専従スタッフとなっていました。以来、脱原発をめざしながらも、片手間には続けられない救援活動に関わって参りました。

そして 2011 年 3 月の原発震災事故が起きました。うろたえながらも、チェルノブイリ子ども基金を立ち上げたときと同様、広河隆一さんの呼びかけで、黒部信一さんたちチェルノブイリ子ども基金有志と「未来の福島こども基金」の活動を開始したのは事故から 3 か月後の 6 月でした。まず、最初に食品の放射能測定器を贈るためのカンパを募り、次に、子どもたちを保養させるためには施設が必要ということでカンパを募りました。子どもたちを内部被曝から守るためのこれらの活動は、チェルノブイリ救援活動から学んだことでした。

ベラルーシの保養施設「希望」が開設したのは 1994 年、事故から 8 年後でした。原発、核、放射

能、それらに対して、旧ソ連の政府は明らかにある程度のことは把握していたように思います。ただ、経済的にも社会的にも困窮し、混乱していました。体制の崩壊にも原発事故が影響したとも言われています。その中にあって、それなりの時間がかかったのでしょうか。政府に力がなくともチェルノブイリ事故は子どもたちの健康に悪い影響を与えることを知っていた欧米諸国は、こぞって保養を支援しました。保養が必要だ、という共通認識がそこにはありました。その点が日本と大きく違います。福島原発の事故が起きた際、原発・核・放射能に対して、政府はどれほどを知っていたのでしょうか？ どれほどの自覚があったのでしょうか？ ご存じのとおり、原発を動かす資格のないような企業が原発を運転して、核の何たるかをわかっていないような政府が運転を許可していたのです。旧ソ連に比べたら、はるかに経済的に優位の立場にありながら、放射能から国民を守ろうとしなかったのです。

放射能の被害をわかっている旧ソ連政府は、保養が必要ということを認めていました。だからこそ、ベラルーシでは事故後 30 年経った今でも、子どもたちへの保養が政府の支援のもと続けられています。残念ながら、戦争も起きているウクライナでは、チェルノブイリ法の履行は難しく絵に描いた餅であるとも言われています。ベラルーシもチェルノブイリ被害者への援助はできるだけ小さくしたいのが本音です。私たちのような海外からの支援は今後も続けなければならないでしょう。同時に、日本においては、保養が当たり前、順番で行っておいで、という、社会全体の共通認識が広まってほしい。政府が認めなければ、海外の人たちも支援はしにくいでしょう。保養を市民の寄付だけで続けるのには限度があります。1 日も早い支援を政府にのぞみたいと思います。

向井 雪子

「チェルノブイリ子ども基金」代表
「未来の福島こども基金」世話人

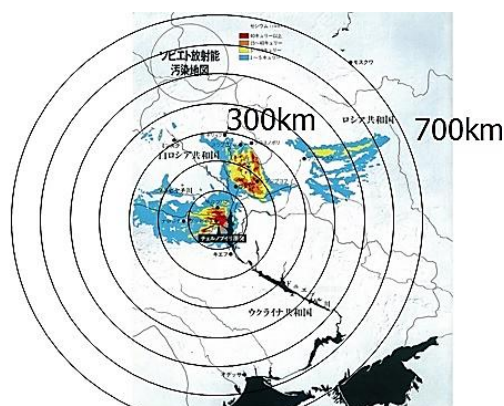
（4/23 プログラムに記載の主催者挨拶文）

原子力を選んでいない子どもたちを被ばくから守りたい

小出 裕章 (前編)

今日はチェルノブイリから 30 年、福島から 5 年ということで、子どもたちの被ばくをなんとか少なくしたいということでやってきた 2 つの団体が、この集会を開きました。私は「原子力を選んでいない子どもたちを被ばくから守りたい」というタイトルでお話したいと思います。

チェルノブイリ原発



チェルノブイリ原発は、1号機2号機3号機4号機と並んでいて、爆発したのは4号機という4つあるうちの1つだけが爆発してここから大量の放射線が放出されました。あと3日でちょうど30年になります。これがチェルノブイリ周辺の地図です。ソ連という国があったときにこの事故が起きました。ソ連という国はソビエト共和国連邦というのが正式名称でした。一番大きな国はロシア共和国（現在のロシア）で、首都はモスクワです。ロシア共和国から西へ向かっていきますと国境線が南北に走っていきまして、西が白ロシア共和国（今はベラルーシ）、首都はミンスクです。その南側がウクライナで首都はキエフです。

チェルノブイリ原発はキエフの北 100 キロ、すぐ北側が白ロシア共和国との国境線になるという位置にありました。ここから大量の放射性物質が噴き出すということになりました。いろいろ色が塗ってあるわけですが、チェルノブイリ原発の周辺の真っ赤に塗ってあるところは猛烈に汚染されました。この汚染地域から 13 万 5 千人の人が強制避難という形で故郷を汚染されました。しばらくたったら、汚染がそこだけでおさまっていないということに気がつきました。ここはチェルノブイリから 200 キロ 300 キロ離れたところですが、猛烈に汚染されているということがわかって、20 数万人が強制避難させられたところなんです。なんで 200 キロ 300 キロ離れた地域で猛烈な汚染が起きたか、それは放射能の雲が流れた時にこの地域で雨が降ったからです。その雨は天然の雨でなかったという説もあります。人工的に降らせたと。なぜかというところ、この雲がずっと流れていくとモスクワに流れていく、モスクワを汚染させないために人工的に雨を降らせてこの地域が汚染された。本当かどうかはわかりませんが、200 キロも 300 キロも離れたところで猛烈な汚染が生じたということは事実なのです。赤とだいたい色に塗ったところは強制避難地域、その他の色のところは、法令で放射線管理区域というところに指定して人々が住んではいけないという汚染を受けたところです。チェルノブイリから見ると 600 キロ 700 キロ先まで汚染してしまったという事故だったわけです。

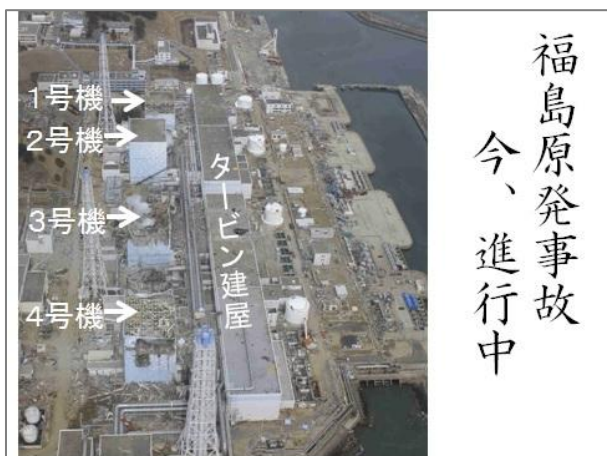
チェルノブイリ原子力発電所のごく近くの

村々、そして数か月たって 200 キロ 300 キロ先の村々の人は強制避難ということになって、人々は追われてしまったわけです。そこには広河隆一さんがたびたび訪ねて行って「消えた 458 の村」という写真集を出版されています。

これは東京都の面積(2102 平方キロ)です。小さい面積ですけど 1200 万人以上の人に住んでいます。チェルノブイリでどれほどの地域が汚染したかという、猛烈な汚染地域が東京都より広い面積で、その周辺にも到底人が住めないというところが約 1 万平方キロ。東京都が 5 個まるごと入ってしまうような広い地域から人々が追い出された地域になりました。約 40 万人の人たちが突然生活を根こそぎ破壊されて、家もつながりも失う、子どもたちは学校も失う、友達も失うということがこういう範囲で起こりました。日本の面積は 35 万 8 千平方キロですが、チェルノブイリの放射線管理区域は 700 キロぐらまで広がったわけです。約 15 万平方キロ、本州の約 6 割の広大なところが汚染を受けてしまいました。565 万人の人たちが住んでいましたが、もうソ連という国でも助けることができないということでそこに捨てられるということになりました。事故から 5 年たってチェルノブイリ法ができて、汚染地の人は希望すれば移住できるということになったのですが、自分の生きていた土地を捨ててどこかに行くということは大変困難なことで、こういう地域から移住できている人は限られた数となっています。

原子力発電所で大きな事故が起きればこんな悲惨なことになると、30 年前に私たちは日

本人も含めて知ったわけですが、それでも日本の国は原子力を続けました。チェルノブイリ原発の事故はロシア製だったから起きた、ロシア人が馬鹿だから起きた、日本人は優秀だ、日本の原発は安全だと言いながらしがみついて、ずっと来てしまいました。



そして福島の事故が起きてしまいました。福島の場合、原子炉はタービン建屋の後ろ側にあり、一番上に映っているのが 1 号機です。2011 年 3 月 11 日に運転中に地震と津波に襲われて、原子炉があえなく溶け落ちていく過程で水素という爆発性のガスが発生するという物理化学的な理由により、原子炉建屋の最上階に水素がたまって爆発を起こしました。最上階は骨組みだけになってしまったのを見ていただけたと思います。

2 号機も炉心が溶け落ちて、大量の水素が発生したのですが、2 号機の原子炉建屋が爆発を起こさずにそのまま姿が残っています。海側の壁に 1 号機が爆発したときに穴があき、水素が外に出て爆発は免れたのですが、この 2 号機こそが内部で最大の破壊を受けていて環境に放射線をまき散らした主犯です。と、国と東京電力が言っています。

その手前は 3 号機です。やはり運転中で地震と津波に襲われて炉心が溶け落ちて水素が発生して爆発しました。もうボロボロに壊れてしまって、1 号機の場合はまだ建屋の骨組みが残っているように見えるが、3 号機はぐちゃぐちゃで骨組みすら維持できずに、地上に崩れ落ちてしまうほど爆発してしまったのです。

一番手前は 4 号機です。4 号機は当日運転していませんでした。本当は炉心が溶け落ちるということは避け得たのですが、なぜか 4 号機も爆発して最上階は吹き飛んでしまいました。そしてこの 4 号機の場合は大変危機的な状況になりました。炉心は解けなかったのですが、炉心の燃料が使用済み燃料層というプールに移された状態でこの事故に突入しました。使用済み燃料プールは、最上階の下の階の抜けてしまった壁の隣に埋めこまれていた状態で事故が進行しました。もし壁が崩れ落ち使用済みプールが崩壊してプールの中身の燃料が大量に溶けてしまうと、東京すら人が住めなくなるといって当時の原子力安全委員会委員長の班目さんが報告書を出しました。

みなさんのご記憶かもしれませんが、当時自衛隊のヘリコプターが福島第一原子力発電所の上を飛んで行ったことがありました。何をしたかという、この壊れてしまった建屋の天井から下を見るとプールの水面が露出しているのが見えるのです。そのプールの水は使用済み燃料が発熱していますので、どんどん減っていったのです。もしその水が干上がってしまって使用済みの燃料が水面から顔を出すようなことになれば、東京すら住めなくなるといって、とにかくプールに水を入

れなくては行けないと、自衛隊のヘリコプターが上空から水をまいたりしました。自衛隊員も人間ですから、被曝をすると死んでしまいますので、近づくことができない。上空高いところから狙ったけれども、落とした瞬間に水がばらけてしまって、入りませんでした。

次は東京消防庁の消防車が行きまして、遠くから放水銃で入れようとしたのですが、これもなかなか入らない。最後にこの穴の開いた壁のすぐ下のところに、私たちがキリンと呼んでいるコンクリートポンプ車を連れてきました。高所コンクリートポンプ車、高いところにコンクリートを流し込むための特殊なポンプ車ですけれども、コンクリートの代わりに水をプールに入れるということによって成功しまして、東京が壊滅するということのを避け得ることができました。今日この会場に来てくださっている練馬区の方もいらっしゃると思うし、かなりの方が東京の方だと思いますが、下手をするとみなさん自身が家を失って地域のつながりを失って、とそういうことになる一歩手前で、ようやくにしてその最悪の事態を避けることができました。

でも残念ながら未だに福島事故は進行中です。事故からすでに丸 5 年たって 6 年目に入ってしまいました。1、2、3 号機は炉心が溶け落ちてしまった、溶け落ちた炉心が今どこにどんな状態であるか、それすらわかりません。私が分からないのではなくて国もわからない。なぜかと言えば、現場に入れないのです。5 年以上たっているのに。事故を起こしたのが火力発電所なら簡単です。何日か火事が続くかもしれない

けれども、それが収まれば現場に行って、どこがどうなったのか調べることができます。大抵の場合は修理ができます。もちろん再稼働もできます。しかし壊れてしまったのが原子力発電所のため、5年以上たった今になっても現場に行かれないのです。人間が行けば即死です。仕方がないので東京電力はロボットを作って現場に行かせようとしてきました。

しかし意外に思われるかもしれませんがロボットというのは被曝に弱いのです。なぜかというロボットは今コンピュータで動いている、コンピュータの命令はICというチップに書かれていて、コンピュータの言語は二進法という言語で書かれています。日本語でもない英語でもない二進法です。0か1かというのを判読しながら0だったらこっち1だったらこっちと、一つ一つ読みながら命令を実行していくのですけれども、ICのチップにもともと0と書いてあった場所に放射線がとびこんできて1と書き換わってしまうと命令体系が全部変わってしまうわけです。そのため東京電力が送り込んだロボットは、全部討ち死にして戻ってくることができないという状態になっています。

東京電力はまだロボット開発をずっと続けていて、なんとかロボットを現場に行かせようとしていますが、たぶんできないと思います。最後はいわゆる胃カメラのように、遠隔操作で送り込むようなカメラをなんとかして現場まで行かせて現場の状況を知るといふ、そんなことぐらいしかできないのではないかと考えていますが、それが可能になるのにこれから何年かかるのかすらわかりません。

あふれる汚染水

でも溶け落ちた炉心はどこかにある、その炉心がもしもう一度溶けるようなことになれば、放射能が吹き出してしまうので、とにかく冷やし続けなければならないということで、何をやっているかといえ、現在に至るまでひたすら水を入れているのです。もともと炉心という部分があった場所をめがけて水をかけている、水をかけてどこか炉心に届いて冷やしてくれるだろう、という期待のままに水をかけ続けているのですが、そんなことをすれば、かけた水が放射能で汚れてしまうというのは当たり前のことで、毎日300トン400トンというような汚染水がどんどんあふれてくるという状態になってしまっている。東京電力はこれまでそれをタンクにためてきていますけれども、80万トンを超えて敷地の中にたまってしまっている。福島第一発電所の敷地は限りがあるわけで、近い将来にこのやり方は破たんします。そんなに遠くない将来、「もうだめだ」と汚染水を海へ流すとそんな状態になってしまうだろうと私は思っています。

でも、なんとか海に流す放射性物質を少なくしなければいけないということで今現在も7000人から8000人の労働者が放射能と戦って閉じ込め作業を続けている。そしてその労働者は東京電力の社員ではありません。下請け、孫請け、その下請け、孫請けと8次、9次、10次というような猛烈な下請け関係があつて、給料を次々とピンはねされていっているという劣悪な雇用関係で雇われている労働者が、被曝をしながら放射能の閉じ込め作業にあた

っている。それがこれから何年、何十年と続いていかざるを得ないという事故が今続いているわけです。

そして一方では大量の放射性物質が環境に放出されてしまいました。チェルノブイリでもそうであったように10万人を超える人たちが、強制避難という形で故郷を追われています。みなさん想像してください。みなさんは今日ご自宅で起きて、あ、今日は夜チャリティコンサートに行くんだと思ってこの場に来てくださっている。終われば家に帰って、明日はこんな仕事がある、こんな予定があると思いが、何気なくご自分の日常が続いていくと思われているでしょうが、それが突然なくなってしまう。すべてが奪われて生活そのものが断ち切られてしまうということになった。それが1人ではない、2人ではない、10人でも100人でも千人でもない。10万人を超えるような人たちがそういう境遇に突然落とされて、5年以上たった今もそれが続いている。その周りには百万人単位の人たちが、チェルノブイリでもそうであったように、本当であれば放射線管理区域にしなければいけない放射能汚染地に捨てられてしまって、現在も被曝をしながら生きざるを得ない。それが今後何十年も、何百年も続くしかない、という状態で事故が続いているわけです。

原子力緊急事態宣言

みなさんなんとなくもうお忘れになっているかもしれませんが、2011年3月11日に原子力緊急事態宣言というものが発令されました。現在は緊急事態だから法律をもう守らないでもいい、ということにされた。そしてそ

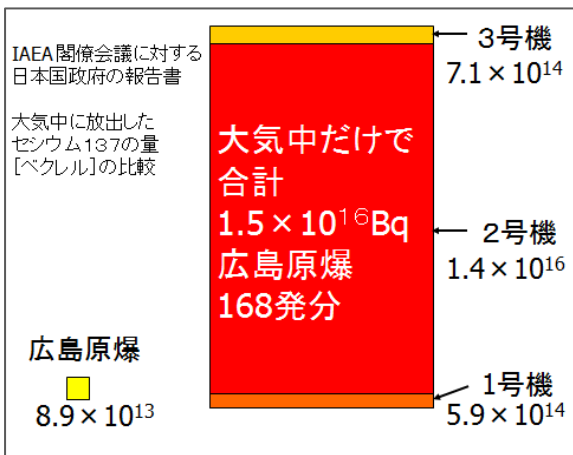
れが5年以上たった今もその状態が続いている。緊急事態というのが例えば1週間続いた、いや、しょうがないひと月、緊急事態が続いてしまったということはあり得るかも知れませんが、5年以上たった今も緊急事態が続いているのです。そしてこの緊急事態は何十年も実は解除することができないのです。この汚染を生じさせている重要な放射性物質はセシウム137という名前のついた放射性物質ですけれども、それが半分になるのに30年かかるのです。チェルノブイリから30年たってようやく汚染が半分になるというだけであって、福島の場合はまだ5年です。まったく汚染は減らないまま、今まだあるわけですし、これから30年たっても半分に減るというそれだけのことであって、原子力緊急事態宣言は何十年も解除することができない。日本というこの国は何十年間も緊急事態を続けようという、そういう国に今なってしまっているわけです。

大気中に放出したセシウム137の量[ベクレル]

一体どれだけの放射性物質 —セシウム137で聞いていただこうと思いますが—が放出されたのかということを見ていただきます。

IAEA という国際原子力機関という国際的な原子力を推進する団体、私は犯罪者集団の親玉だと呼んでいますけれども、その集団に対して日本国政府が報告書を出して、大気中にどれだけの放射性物質をばら撒いたかという数字を示しています。その中でセシウム137という放射性物質についての値を今からみなさんに見ていただこうと思います。まず、左の下に黄色い四角を置きました。これは、広

島原爆が爆発したときに空気中にばら撒かれたセシウム 137 の量です。 8.9×10^{13} 乗ベクレルという数字です。でもみなさん全然こんな数字ピンとこないと思いますので、こ



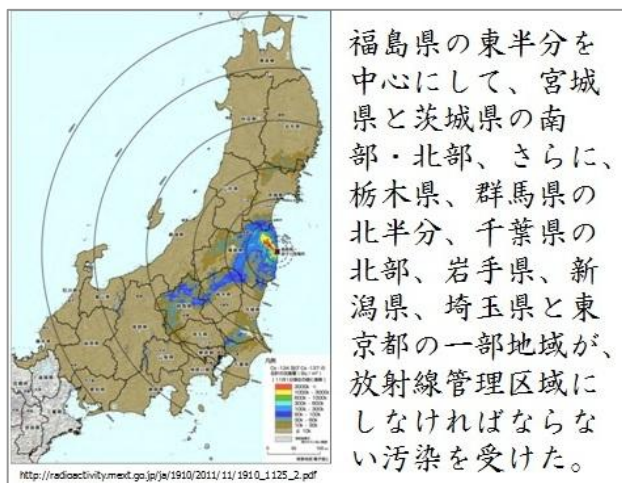
の四角の大きさだと思ってください。では福島第一原子力発電所の事故でどれだけのセシウム 137 が大気中に放出されたか、と日本国政府が言っているかという、こうです。1号機だけで広島原爆の6発分～7発分です (5.9×10^{14} 乗)。なんと言っても悪かったのは2号機だと (1.4×10^{16} 乗)、3号機もまた大気中に放出して (7.1×10^{14} 乗)、当日運転中で炉心が溶け落ちてしまった1号機2号機3号機3つを合わせると合計で 1.5×10^{16} 乗ベクレルというセシウム 137 を大気中にばら撒いたと、日本国政府が言っています。広島原爆に換算すると168発分です。広島原爆一発分の放射能だって猛烈に恐ろしいものなのです。それなのにその168発分を大気中にばら撒いてしまったと、日本国政府が言っている。これは大気中だけなのであって、今現在も海へ向かってどんどんと放射性物質を流し続けているという、そういう事故が福島第一

原子力発電所の事故です。広島原爆の何百発分というようなものを撒き散らして、収束すらできずにいまだに流し続けているという、そういう事故なのです。

大気中に出てきた放射性物質はどうなるのでしょうか。吹き出してきてしまえば後は風に乗って流れます。

福島第一原子力発電所の位置は、西側が陸地で東側が全部海。そして日本というこの国は北半球温帯というところにありまして、上空高いところに行くと偏西風という強い西風が吹いてきます。そのため福島第一原子力発電所から放出された放射能のうち、上空高いところまで立ち昇った放射能は偏西風によってみんな太平洋に向かって流れていったそうです。日本という国にとってはありがたいことだったと思います。

でも、地上ではもちろん西風だけではありません。北風の日も南風の日も、東風の日もあるわけで、日本の国土もこんなように汚れたとあって、日本国政府がこの地図を作って私たちに示したものです。赤、黄、緑と色分けしたところが福島第一原子力発電所から北西の方向に広がっていきますが、この地域は猛烈な汚染を受けたところです。放射能の雲が流れてきたときに、この地域に雨と雪が降りました。そして空気中から放射性物質が洗い落とされて、大地を猛烈に汚染してしまいました。この赤、黄、緑のところから約10万人を超える人たちが、ある日突然、生活を根こそぎ破壊されて、流浪化して今も帰れないということになっているわけです。



しかし、汚染はそれではもちろん済まずに、例えば福島県の中央部を南北に青い帯が縦断しています。ここは福島県の中通りと私たちは呼んでいるところで、東側には阿武隈高地という山並みがあります。西側には奥羽山脈という山脈が青森からずっと連なっていて、東と西に山があつて、山に挟まれた平坦地が中通りです。大変住みやすいということで、北から伊達市、福島市、二本松市、郡山市、須賀川市、白河市というように、福島県内の人口の多い都市がずらりとこの中通りに並んでいたわけですが、放射能の雲は山間の平坦地を舐めるように汚染を広げていって青い帯になっています。

その汚染は栃木県の北半分にもつながっていますし、群馬県の北半分にもつながっています。群馬県と長野県の県境には、やはり高い山並みがあつたので、放射能の雲がその山を乗り越えるのではなくて、山腹を巻くように流れていって、群馬県の西部を汚染しています。埼玉県の西部、東京の奥多摩というところも汚染していく。ある時は北風に乗った放射性物質が南へ流れていって、福島県の浜

通り、茨城県の北部、茨城県の南部、千葉県の北部、東京の下町、といったところも汚染をしてしまいました。南風が吹いていた時には、宮城県の南部も汚染していますし、宮城県の北部、岩手県の南部というようなところも汚染しています。

私は今、「汚染」という言葉で皆さんに話を聞いていただいたわけですが、少し面倒臭くて申し訳ないのですが、数字で聞いていただこうと思います。群馬県の西部を汚染しているくすんだ緑、福島県の会津にもありますし、宮城県の南部・北部、岩手県の南部にもある。もちろん茨城県の北部・南部、千葉県の北部、東京の下町の一部、奥多摩、埼玉県の西部というところにもありますけれども、こういう場所は一平方メートルあたり、セシウムという放射性物質が3万ベクレルから6万ベクレル降り積もったと、日本国政府が言っている場所です。

この福島県の中通り、汚染している青い帯、薄い青と濃い青があるのですが、濃い青の方が汚染が少し少ない、薄い青の方が汚染が強いというのですが、濃い青の方は6万ベクレルから10万ベクレル、セシウムが降り積もった、薄い青のほうは10万ベクレルから30万ベクレル、セシウムが降り積もったと、日本国政府が言っているところです。

ではこの数字はどういうことかという、ひとつ比較を聞いていただきます。私は去年の3月まで京都大学原子炉実験所という場所で働いていました。自分の職場に原子炉を持っていて、原子炉を動かしたり、放射性物質を取り扱ったりするという非常に特殊な職場

でした。私はそこで働いていましたし、時々、放射線管理区域という場所に入って放射能を扱って実験研究をしていた人間です。その放射線管理区域、みなさんは入ることすら元々許されない場所です。私のような特殊な人間だけが、入って仕事をするのが許されるのですけれども、私が放射線管理区域に入った途端に、私は水を飲むことを禁じられます。食べ物を食べることも、もちろん許されません。そこで寝ることなんてとんでもないことです。管理区域の中にはトイレ也没有なので排泄すらできません。つまり人間が生きるなんてことは到底できないという場所が放射線管理区域です。でも私は職業柄しょうがないのでその場所に入ります。ただし、気持ちが悪いのでなるべく早く出たいと思うのですが、放射線管理区域の出口にはドアがあって必ず閉まっている。なぜかという私が管理区域の中で仕事をしたということは、私の体が放射能で汚れているかもしれない、衣服が汚れているかもしれない、手が汚れているかもしれない。そのまま管理区域の外側に出してしまえば普通の人々を被曝させることになる。だから管理区域の外側に出ようと思うなら、衣服が汚れていないか、手が汚れていないか、足が汚れていないか、ちゃんと測定しない限りはドアを開けてやらないという、そういう仕組みになっていたわけです。

ではいくらの汚染ならばドアが開いてくれるかという、一平方メートルあたり 4 万ベクレルなのです。つまり一平方メートルあたり 4 万ベクレルを超えて汚れているようなものがあれば、もうドアは開かない。そんなも

のは管理区域の外に持ち出すことはできないという、それが日本の法律でした。私は何十年もその法律に従って、何とか汚染を管理区域の外側に持ち出さないようにと細心の注意を払って生きてきました。

しかし、このくすんだ緑は一平方メートルあたりすでに 3 万ベクレルから 6 万ベクレル汚れているのです。私の実験着が汚れている、私の手が汚れているというのではないのです。大地自身が汚れている。青いところにいってしまったら一平方メートルあたり 6 万ベクレルを超えているのです。薄いほうの青だったら 10 万ベクレルを超えて汚れているという、どうにもならないほどの汚染を受けてしまったということなのです。

今ここは東京・練馬区です。幸いなことに比較的汚染の少ないところです。ですからこの巨大な建物だって、たいして汚染を受けずに済んだわけです。しかしこの建物がもし福島市にあったということになると、この建物全部が管理区域以上に汚れているのです。道路に出れば道路が汚れているのです。駅に行けば駅が汚れているのです。川に行けば川が汚れているのです。練馬区に田畑があるか、私はよく知りませんが多分まだあるでしょう、そういう田畑も汚れているのです。山に行けば山も汚れている、とにかく大地全部がもう汚れてしまったと、日本国政府が地図を書いて示してくれたという状態になっているわけです。

これから日本という国は何十年間も原子力緊急事態というのを続ける都市、そういう国になってしまいました。

解除できない原子力緊急事態宣言

この日本という国、もともとは法治国家だと言われてきました。国民が何か悪いことをすれば国家が処罰する。刑務所に引っ張っていくから巷には悪い奴はいない、安全で安心な国なんだ、と国が私たちに言ってきました。それなら、法律をつくった国は自分の法律を守るのは最低限の義務だと私は思います。そして日本の国がつくった被曝に関する法律はたくさんありました。例えば、みなさんのような一般の国民は一年間に一ミリシーベルト以上の被曝をさせてはいけないという法律がありました。そして、放射線管理区域から何か物を持ち出すときには一平方メートルあたり 4 万ベクレルを超えているようなものは、どんなものでも持ち出してはいけないという法律もあったのです。

しかしこの事故を引き起こしてしまったことに最大の責任のある日本の政府、こういう法律をつくった日本の政府がどうしたかというと、原子力緊急事態宣言を発令して、それを理由に自分がつくった法律を一切反故にしよう、もう守らなくてもいいという、そういうことにしてしまって 5 年以上たった今もこの状態が続けている、これから何十年もこの状態を続けようという国がこの国なのです。

龐大に発生する除（移）染廃物

捨てられてしまった住民たちは大変です。毎日毎日、被曝を気にしながら生活せざるを得ないわけです。何とか少しでも被曝を減らしたいとして、いま福島を中心としている汚染地では除染という作業が行われています。

除染というのは汚れを除くと書くわけですが、でも、汚れの正体は放射能であって、放射能を消すなんて力を人間は持っていない、つまり言葉の本来の意味で言うなら、除染ということは出来ない。出来ることはここにある汚染を別の場所に移すということだけが出来ます。そのため私は移染という言葉を使うようにしています。具体的に何をやっているかというと、家々の周りの土や学校の校庭の土を剥いでフレコンバックという袋に詰めて、どこか別の場所に移動させる、というようなことをやっている。そこら中にこういう袋が野晒しで山積みになってしまっている。一千万袋というほどの袋がそこら中に積みあげられてしまっているわけです。

放射能を消したわけではありません。ただ、ただ、袋に詰めて積みあげている、ということをして今日までやってきたわけです。でもこれ袋なのです。もちろん破れます。どんなになっているかというと積みあげた袋の中から、また植物が芽を吹き出して袋を破って外へ出てくる。放射性物質も一緒に外へ出てきてしまっているわけです。こんな袋がそこら中に、住民の生活空間に積みあげられていることになる。どうしていいかわからない、ということになってしまっていて、国のほうはそれを中間貯蔵施設というところを集める、というようなことを言っています。

放射能は五感で感じられない

でも何とかしなければいけない、どこかに押しつけなければいけない、というのが私たちが直面している現実なわけです。

みなさんよく放射能は五感で感じられない、

と聞かされてきたと思います。私は先ほど福島第一原子力発電所から空気中に放出されたセシウム 137 の量というものをみなさんに数字で見いただきました。

1.5×10 の 16 乗ベクレルで、広島原発 168 発分だと聞いていただきました。この放出されたセシウム 137 のほとんどは、偏西風に乗って太平洋のほうに流れていってくれました。日本の福島県、茨城県、宮城県、栃木県、群馬県という、そういう範囲に降り積もったセシウム 137 をとにかく全部かき集めてきて、一箇所に集めたならばどれだけの放射能になるか、ということを私の知人（故・沢野伸浩さん・金沢星陵女子短期大学部）が、丹念に評価してくれました。

みなさんこの、 1.5×10 の 16 乗ベクレルとか、 2.4×10 の 15 乗ベクレルという数字を聞いても全然ぴんとこないだろうと思います。ベクレルというのは放射能の単位で、みなさん普段こんな単位にあったこともないわけですから想像できないで当たり前です。そこでこれを重さに換算してみようと思います。 1.5×10 の 16 乗ベクレルというセシウム 137、あるいは日本の大地を汚して、今フレコンバックに詰めて野積みになっている。フレコンバックに集められるセシウムなんてほんのごく僅かなんですよ。山の移染なんか出来ないわけだし、田畑だって移染で土を剥いでしまえば田畑が死んでしまうわけで、できないわけで、今やっている移染で出来ているのは、人々が生活している空間だけです。家の周り 20 メートルとかそういう範囲だけしか出来ていない。ほんの僅かなものを集めて一千万袋というフ

レコンバックにもうなってしまうわけですけども、とにかく山だろうと林だろうと、田畑だろうと全部集めてくるとこれだけになるのですけれども、こういうセシウム 137 の量をもし重さに換算したらどれだけになるかというのと表のとおりです。



放射能は五感で感じられない。
なぜなら、五感で感じられるほど放射能が存在していれば、人間は簡単に死んでしまう。

大気中に放出されたセシウム137の放射能
(日本政府がIAEAに報告した値)

1.5×10^{16} ベクレル

重量では 4.7 kg

日本の陸地に降下したセシウム137の放射能
(故・沢野伸浩さん(金沢星陵女子短期大学部)の評価)

2.4×10^{15} ベクレル

重量では 750 g

放出した全量で 4.7kg、東北地方、関東地方の広大なところを放射線管理区域以上に汚してしまったセシウムを全部集めてきたところで 750g しかないのです。目に見えるはずなんかないのです。放射能が目に見えない、五感に感じられないとなぜいわれるかというと、人間の周りに五感で感じられるほどの放射能があれば、人間は簡単に死んじゃうからなのです。五感で感じる前に死んじゃうから感じられないのです。ただそれだけのことなのです。そういう毒物を相手に今わたしたちは闘っているという、そういう状態になってしまった。

(→ 次号に続く。)

※当基金のホームページにおいて講演の動画をご覧ください。



<4/23 講演会・チャリティコンサート来場者の感想> ◆原発をとめられず今日に至ったのは、先生の仰るとおり我々の世代の責任。これから子ども達に何が出来るか、改めて考えてみようと思いました。良い機会を作っていただいた主催者の皆様にお礼申し上げます。(60代女性)◆若者の参加が少なかったように思う。このように音楽や講演など各分野の方々の協調、共同のイベントは大変有意義。(50代男性)◆懐かしい曲ばかりで素敵なひと時でした。原子力の恐ろしさがすごくわかりました。(80代女性)◆重たい話の前のコンサート、心が洗われた。コンサート付きの講演会、とても素敵な企画だと思った。(30代女性)◆フルート、ピアノのお二人の息がピッタリよかったです。小出先生のお話は解り易く、ともすれば毎日の生活に埋没してゆきそうな日々を、あの大事故の恐ろしさを改めて刻みました。この国の指導者たちの身勝手さに怒り心頭です。小出先生、本当にありがとうございます！(60代)◆責任をとらず被ばくを放置した上、原発をいまだ推進しようとする政府には怒りを感じる。忘れず、諦めず、未来のためにできることをしたい。(50代女性)◆小出氏のお話は大変解り易く、血の通った話でしたので、身にしみて理解できました。コンサートも大変ステキでした。ありがとうございました。(60代女性)◆コンサートは心洗われるひとときでした。小出さんのお話で改めて被ばくの深刻さを実感しました。子どもを守り、大人はそれなりの加害事実を認識せよ。自分にできることを少しでもしていかなければと改めて思いました。(60代)◆福島状況、想像していた以上に深刻だとわかった。小出先生の「福島の事故は大人である全ての私達に責任がある」という言葉、心に響いた。被ばくの影響を最も受けるのは子どもである。私も一歳の子どもの育てている中で、福島ことは決して他人事ではない。何とかできることを取りくんでいきたい。(30代男性)◆放射能の汚染の現実をはっきり知らされた。これから私たちに何かできるのか。あ然とする気持ちになります。機会ある毎に何らかの行動をしていきたい。コンサート、素

晴らしかった。(60代女性)◆コンサートとお話、なごやかで気持ちが伝わった。小出先生の訴えは切実。足を運び良かった。(40代男性)◆大変心に残る講演。今後自分がどのように向き合っていくのか問われた気がした。子ども基金のイベントに参加したのは初めて。コンサートも素敵だった。(40代女性) ◆イベントのチラシは、東上線川越駅改札前の待ち合わせポイント、時の鐘のラックに置いてもらいました。吉原さんと新垣さんの魂のこもった美しい演奏とお話、佐々木さんと黒部さんの魂をかたむけていらした活動報告、小出さんの魂の底から出る声、そして最前列の隅に座った私の背中に感じる満席の人たち一人一人の想い、皆さんのパワーをもらい勇気をもらいました。(50代男性)◆「原子力緊急事態宣言」が今なお続いている、日常がとつぜん断ち切られるのが原発事故ということを改めて考えさせられた。(60代男性)◆情感ある演奏にひきこまれました。小出先生の「自分が被ばくしても、何としても子ども達を被ばくから守るのが大人の責任」という言葉を改めてかみしめています。忘れてはいけない、日々決意していこうと今日、しっかり胸にきぎみました。ありがとうございます。(60代女性)◆音楽で少しでも被災された人たちの心を癒したいという吉原さんの言葉に共感を覚えた。小出先生の講演を聞き、私がいかに原発事故に無知であったかを思い知らされた。“風評被害”で片づけていた自分を恥じた。(70代男性)◆子どもの体を心配すると、病院でも身内にも「心配しすぎ」と笑われ呆れられ、相手にもされなくなる。小出さんのお話が聞けてとても良かった。時々自分の考えがおかしいのではないか、人を傷付けてしまうのでは、と諦めてしまうが、やはり見つめ続けなければならないと思った。(40代女性)◆「原子力緊急事態宣言」は、事故から6年目に入った今も解除されていない。原子力の暴走を許した大人たちは、何としても子どもたちを守らないといけな。どんなに辛い事実でも視ないより視たほうが良い。小出先生の講演会でしか聞けない言葉。足を運んで良かった。(50代女性)◆毎日成長している子どもが一番

被ばくの影響をうけていることに涙がでます。小出さんの「どんなに辛い事実でもみないよりも知ったほうが良い」まず事実、真理をみるという言葉、心に残りました。(30代女性)◆吉原さん、新垣さんの気持ちのこもった演奏に、時には言葉よりも心に響く思いがある事を感じました。広河隆一さんの写真も、胸のつまる思いで拝見しました。そして小出先生の講演は、福島の実実に目をそらさずに、ストレートでかつわかりやすく、これからどう私たちが動くべきか考え直すきっかけを頂きました。パルシステム東京主催の学習会、保養報告会で佐々木さん、向井さんのお話を伺い、学びを深めています。チェルノブイリ事故当時私は8才でした。自分の親は原発がなければ生活できないと信じています。今日の小出先生のような現実の話を多くの市民に知ってもらいたい。(30代女性)◆老人の私には、なかなか出資協力は出来ないけど、これからどうぞ皆さまともつながりを大切に行きたいです。友達にも広めたいと思っています。(男性)◆被ばくの怖さ、知っているようで何も知りませんでした。我々の責任と無力さを感じた。子ども達を守るのは大人の責任としてしっかり受け止めたい。ますます原子力は不要であると思った。(60代女性)◆うっとりフルートの後、小出さんの心からのメッセージ、大人たちの責任、まさに同感。残生をもって未来人を守る方策を考え出さねばと、あらためて…。ありがとうございました。(60代男性)

<4/23 写真展来場者の感想> ◆取り戻すことのできないダメージを被ることがわかっているのに、なぜ人は原発を手放すことができないのか。本当に愚かだと思う。(40代) ◆福島原発事故の影響で、水、野菜、米…どれだけ汚染されているのかと思うが、写真のキャプションにあるように、国は違っても、思うことは同じで、安心な水や食べ物を食べたいと思っている。時間は流れても。(40代女性) ◆原発は廃絶しないとイケない。原発被害をきちんと捉えている広河さんは素晴らしい。(60代) ◆チェルノブイリ、福島が何となく意識の外に移っていくような環境の中、このような写真展を続けていることに感動している。(60代男性)

◆せつない。(40代女性) ◆原発再稼働をした日本。本当にこれでいいのか考えさせられる。(40代男性) ◆胸が痛み、言葉を失う。日本の経済優先の考え方、原発再始動、許せません。自然、命を軽視した国の政策、許せません。(30代女性)

たくさんのご意見、ご感想をまことにありがとうございます。講演会・コンサートにご参加の方から、ご入場いただく際の主催者の不手際についてご指摘がありました。配慮の行き届かなかったことを心よりお詫び申し上げます。また、イベントの構成についてのご意見なども、今後の参考にさせていただきます。(主催者一同)

4/23 ボランティアに参加して

工藤真士（ソーシャルワーカー）

チェルノブイリ子ども基金・未来の福島こども基金さんのイベントに初めて参加させて頂きました。以前から団体については興味があり、事務局長の佐々木さんや今回の登壇者の方々のお話を聞いてみたいと思っていました。現在、私はソーシャルワーカーとして様々な生活課題を抱えている方たちの支援を仕事としております。学生の頃には東日本大震災の被災地でボランティアに参加しました。フォトジャーナリストの広河隆一さんの著書等で、チェルノブイリ原発事故より30年が経つ今でも、被ばくの因果関係を否定できないまま、若くして亡くなる人達の現状を知りました。更にウクライナやベラルーシ政府による（被ばくが原因と考えられる）病気の子どもたちへの支援の打ち切り等のエピソードを知るうちに、東京で生活する私も、福島原発事故に無関心ではいられないと思い、ボランティアに参加しました。

吉原りえさん・新垣隆さんによる演奏はとても素敵なものでした。演奏の合間に吉原さんが語っていた「音楽家として被災された人々に何ができるかを真剣に考えていた」という言葉に、フルート演奏家として社会へ貢献する術を模索する葛藤や覚悟のようなものを感じました。私たちが感じているのと同様の悩みを抱える身近な存在の人が、自らの方法で社会へ貢献しているのだと思い、改めて自分の役割を考えるきっかけになりました。小出裕章さんの講

演は、数値に基づいて論理的に日本の現状を述べて下さり、とても明快でした。多くの人が、放射能被ばくへの様々な見解を一度忘れて、ニュートラルな立場でこのような講演を聞き、その後に改めて自身の見解を考察する機会を持ってほしいと思いました。

今イベントのテーマにもある「原子力を選んでいない子どもたちを被ばくから守りたい」が実現できるような社会になる事を願いつつ、私も微力ながらもその一助になりたいと思います。ボランティアに参加させて頂いて本当によかったです。ありがとうございました。

(今回ボランティア参加して下さった方のうち、最年少25歳の工藤さんに感想を寄せていただきました。)



出演者の皆さん、ボランティアの皆さん、子ども基金の理事・スタッフと

~~~~~  
**<東京都立中央ろう学校(杉並区)チェルノブイリ講演の感想>** 2/16 同校にて事務局の佐々木がチェルノブイリ事故とその影響について講演を行いました。講演を聞いた生徒さん(高校2年生)の感想を紹介します。

◆東日本大震災に関する本に出会って原発に対する考え方が変わった。チェルノブイリも福島も、今も苦しんでいる人がいることを改めて強く感じた。私にも何かできることはないかと悩み抜いて考えた結果、以前興味のあった福祉関係の仕事に将来進んでみようと思った。原発によって苦しんでいる人々の支えになりたい。この講演が私にとっていい機会となった。◆原発の恐ろしさを改めて感じた。一番印象に残ったのは病氣と闘っている被害者の子どもの写真。自分もどんな辛いことがあっても周りにいる人たちを大切にしたいと思った。今まで、原発は必要だが東京に建てるのは反対だった。でも講演を聞いてチェルノ

ブイリと東北地方で被災された人の気持を考える、自分の住んでいる東京に建てるのは反対、というのはおかしいと思った。◆過去の出来事と思っていたが、今も苦しみ、病気に立ち向かっている人がいて、福島も同じようになるという危機があると知った。原発は必要だと思うが、地域の人々の合意が必要だと思う。大きな被害が出る場合を想定し、訓練を定期的に行ったり、少しでも犠牲をださない取り組みをすべきだと思う。◆人の命を守るためにも、原発事故の悪夢を繰り返さないために全廃すべきではないかと思う。だから今はみんなと協力して、節電しながら原発をなくすことが大切だと考える。◆原発事故が人々にどれだけの苦しみを与えたのか、決して忘れてはならないと思う。資源に乏しい日本で原発をなくすのは難しいと感じていたが、事故によって日常生活が奪われることの大きさに改めて向き合う必要があると感じた。

#### <2016年4月の現地情報>

チェルノブイリ事故30周年にあたり現地では様々な動きがあり、関連ニュースが連日伝えられた。

★日本、核燃料貯蔵施設費として350万ユーロをウクライナに拠出(4/6 ForUm ウクライナ) ★ウクライナの国境警備局、ロシアのテレビ局の取材班のウクライナ入国を認めず(4/14 ForUm ウクライナ)  
★IAEA 事務局長、ベラルーシ訪問。ベラルーシ原発1号炉は2018年、2号炉は2020年の運転開始が予定されている。(4/18 ベラルーシ国営TV) ★チェルノブイリ原発2号炉の使用済み核燃料取り出し(4/22 ForUm ウクライナ) ★ベラルーシの農場で汚染牛乳見つかる(4/25 NEWSru.com ロシア) ★ウクライナ世論調査：ウクライナ国民は、チェルノブイリ原発を恐れ、訪問したいとは思っていない(4/25 NEWSru.ua ウクライナ) ★ロシア世論調査：ロシア市民の73%、最新の原発は安全と確信(4/26 NEWSru.com ロシア) ★ベラルーシ国民の12%が放射能汚染地域に暮らす(4/26 NAVINY.BY ベラルーシ) ★ウクライナと日本の「平和の鶴」の交換に大統領夫人出席(4/26 UNN 通信ウクライナ) 【平野進一郎】



### ＜腎臓移植手術後のウクライナの青年＞

2015年10月号ニュースで支援を呼び掛けたウクライナの青年、ウラディスラフ（ジトーミル州・オヴルチ市／1995年生まれ）についてご報告します。1998年にチェルノブイリ事故による障害児と認定されたウラディスラフは、慢性腎機能不全のため血液透析を受けており、腎臓移植手術を希望していました。子ども基金は手術費用60,000ドルのうち、昨年末には15,600ドルの支援を行いました。前号2016年2月号で再度支援を訴え、3/4に手術費用の残額を送金することができました。ご寄付をお寄せくださったみなさま、ほんとうにありがとうございます。以下に、本人から届いた手紙をご紹介します。どうぞ引き続きご支援をよろしくお願いいたします。

☒ (5/11) 手術は成功しました！子ども基金のみなさん、日本のみなさんからのご支援、あたたかい励ましに、僕も家族も心から感謝します。僕の人生に希望が現れました。しかしこの先、長期にわたり回復のための治療が続きます。ウクライナでの治療には薬の購入が必要です。毎週、両親とともにキエフ市にあるシャリモフ・クリニックに検査に行きます。

☒ (5/25) 手術後の回復治療のことで解決しなければならないことが山積みです。最大の問題は、治療に必要な薬を購入することです。移植した腎臓が拒絶反応を起こさないために、しかるべき時期に薬が必要です。回復治療は1年続きます。その後、生涯にわたり検査と2種類の薬が必要です。それらの薬は1カ月分が約1400ドルです。現在、地方自治体は最初の2カ月分の薬代を地区病院に配分しました。しかし僕のような病気の患者の治療

費は予算不足のため（腫瘍病の患者の治療費のみ規定されている）、今後も薬代の援助ができるとは約束できない、とされています。ある薬は、チェルノブイリ被害者の権利として無料で受け取れますが、別の薬（1カ月分500ドル）は自費で購入しなければなりません。病院では各科とも診察は有料で、検査費用も別にかかります。また通院のための交通費もかかります。自分たちの力だけではとても治療を続けられません。ウクライナで薬の費用を援助してくれるスポンサーを探していますが、まだ現れません。できるだけ気を強く持つように努めています。子ども基金と支援者のみなさんがいてくださることに心から感謝しています。みなさんは僕の恩人です。深くお礼を申し上げます。両親からもくれぐれも感謝を伝えてほしいと言っています。またご連絡します。

P・ウラディスラフ



~~~~~

＜子どもたちの夏の保養 ウクライナ・ベラルーシ＞

今年も下記のとおり保養を開催します。みなさまのご支援をよろしくお願いいたします。

【ウクライナ】7/3～7/16 保養施設「カメロト・トゥル」（ヘルソン州ゴロプリスタン地区）子ども40人（8～12歳：甲状腺、消化管などの病気の子）と引率者4人／子ども一人当たりの滞在費14.28ドル×40人×12日間

【ベラルーシ】8/2～8/25 子ども健康回復センター「希望」（ミンスク州ビレイカ地区）子ども36人（8～17歳：腫瘍病、血液病、リンパ系の病気の子）と引率者2人／子ども一人当たりの滞在費17.67ドル×34人×24日間

***** 募金・救援状況 *****

●募金状況

2016年2月～5月

(単位:円)

	2月	3月	4月	5月
募金件数	148件	150件	105件	47件
救援寄付金	872,039	278,530	*1,261,280	274,552
保養費	23,500	74,900	80,000	40,500
特別保養費	-	35,000	35,000	35,000
里子支援	174,420	127,180	51,340	93,920
ウクライナの青年の 治療費支援	37,000	3,044,280	4,000	-
ニュース購読費	44,000	38,000	38,000	4,000
イベント賛同金・ 会場募金	45,000	62,000	250,950	-
合 計	1,195,959	3,659,890	1,720,570	447,972

* (株) カタログハウス様より運営費としての募金 100 万円を含みます。

♥ 募金団体名一覧 (順不同・敬称略)

紙面の都合上個人名は省略させていただいております。ご寄付をいただいたみなさまに心より感謝申し上げます。

【2月】(株)音楽センター 【3月】照恩寺／ヒーリングスペース・レイノ／実教出版
放射能倶楽部／ケイ歯科クリニック 【4月】チェルノブイリ30年・福島5年「広河隆一写真展」太田実行委員会／奥中山教会／まほろば／三重チェルノブイリ被爆児童救援募金／(株)カタログハウス／DAYS JAPAN 【5月】4.26チェルノブイリデー市民集会実行委員会／(有)リンケージ／原発いらない西東京集会実行委員会／ACT 21／おはなしのいえ

●救援状況

2016年2月～5月

(単位:円)

<ウクライナ>

◎ウクライナの青年の治療費支援※ 5,101,560

◎子どもたちの生存

特別保養費 1,102,800

現地銀行手数料 3,308

※16 頁をご覧ください。

<ベラルーシ>

◎困難の中の子どもたちへ希望を

里子支援 36 人(16 年 1-6 月、7-12 月分) 1,196,568

奨学生支援 1 人 22,056

*** ご協力いただいているみなさまへ ***

振込用紙と領収証につきまして、みなさまにお知らせとお願いです。

すべての方に振込用紙を同封しております

事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便払込用紙をお送りしております。決して募金を強要するものではありません。また、すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

払込取扱票のお名前・ご住所は楷書で

ご記入ください

郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかわすれて判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

「受領確認の葉書」をご希望の方へ

通信費・寄付金を納入された方で、受領確認の連絡をご希望の方には、葉書(金額は記載せず)をお送りします。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

「領収証」が必要な方へ

郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認められる領収証です。大切に保管ください。別途領収書がご入り用の際はお申し出ください。

チェルノブイリ30年福島5年救援キャンペーン
小出裕章講演会&チャリティコンサート

募金額 1,098,830円

多くの方にご来場、ご協力いただきましたことを心よりお礼申し上げます。

♥チェルノブイリの子どもへの支援 769,181円

♥福島の子どもへの支援※ 329,649円

募金は以上のようにさせていただきました。

収支報告については下記の表をご覧ください。

チェルノブイリ30周年救援キャンペーン 収支報告			
収入		支出	
入場料	1,133,500	講演会	
賛同金	161,000	会場費	111,300
募金	236,190	舞台費	90,000
物販益	43,972	ゲスト招聘費	26,726
		写真展	
		会場費	3,900
		共通経費	
		印刷費	68,021
		発送費	136,828
		事務費	37,343
		交通費	1,714
小計	1,574,662	小計	475,832
		募金	1,098,830
合計	1,574,662	合計	1,574,662



2016 年版救援カレンダー

2,209,186 円 (5/31 現在)

多くの皆様のご支援、ご協力に心より御礼申し上げます。上記のうち、441,837 円を福島の子どもへの支援※といたしました。

※イベント・カレンダー収益とも、福島の子どもへの支援は「未来の福島こども基金」を通して活用されます。

<http://fukushimachildrensfund.org/>

★支援金の振り込み方法についてのお知らせ★

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。
これまででは同封の振込用紙によるお振込のほか、
下記(1)(2)の口座をご案内してまいりました。

(1)郵便局の口座をお持ちの方: 子ども基金の郵便口座へ直接お振り込み(ATM経由では現在手数料がかかります)

郵便振替口座 00160-4-98316

口座名 チェルノブイリ子ども基金

(2)他金融機関の口座から、子ども基金のゆうちょ銀行口座へのお振り込み

店番 019 店名 ○一九店(ゼロイチキュー店)

預金種目 当座0098316

受取人名 チェルノブイリコドモキケン

(3)これに加え、下記の口座もご案内いたします。

銀行名:三菱東京UFJ 銀行

支店名(番号):新宿中央支店(469)

口座番号:普通 1688367

口座名:チェルノブイリ子ども基金

上記のうち、ご都合のよい方法をご利用くださいませ。

※振込用紙以外でのお振込の場合は、お名前、金額、ご寄付の内容をご連絡いただけますと大変助かります。お手数をおかけいたしますが、どうぞよろしくお願いいたします。

■子ども基金紹介のパンフレット 情報を新たにしたパンフレットを同封します。子ども基金の活動を知っていただくためにご活用ください。このパンフレットを広めてくださる方はお知らせください。お送りいたします。

■ボランティア募集 ニュース発送作業(年3回:2・6・10月)このニュースレターの発送作業をお手伝いいただける方を募集します。どなたでもお気軽にご参加ください。次回 10/15(土)午後1時~4時頃まで。ご都合のよい時間帯だけでも大歓迎です。場所:東京ボランティア・市民活動センター(飯田橋駅ビル セントラルプラザ10階)

※日程が変更になる場合もありますので、ボランティア参加希望の方は、前日までにご連絡ください。平日午前10時~午後5時 留守の場合は伝言をお願いします。

◎「未来の福島子ども基金」総会(2015年度会計及び活動報告) 7/9(土) 14:00~16:00(開場 13:45) 参加無料(豊島区民センター 3F 第13会議室:池袋駅東口より徒歩5分):講演「子どもたちの健康を守るために」黒部信一(未来の福島子ども基金代表・小児科医)/福島のパロネに保養アンケート実施~結果報告、沖縄・球美の里、いわき放射能市民測定室たらちねの状況について、写真と資料で報告します。

(問)fromcherno0311@yahoo.co.jp

090-3539-7611

◎「広河隆一 チェルノブイリ展」6/26(日)まで開催。練馬区立南田中図書館(西武池袋線「石神井公園駅」徒歩15分/「練馬高野台駅」徒歩12分) 入場・観覧無料 (問)Tel.03-5393-2411

■「基金ニュースレター」について 募金をくださった方には、使途の報告としてニュースレターをお送りしています。また、ニュース購読費(2,000円/年)も募っております。印刷・発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。(※ニュースレターは子ども基金のHPでもご覧いただけます。今後、郵送がご不要の方は、お手数ですが事務局までご連絡をお願いいたします。)



＜編集後記＞ 昨年までと比べ、

今年のイベント会場は座席数が多かったため、チラシ枚数も増やし、早くから各方面へ宣伝を始めていました。お申し込みは日を追うごとに増え、4月半ばには予約が定員に達しました。せっかくお申込みいただいたのに、お断りしなければならなかったみなさまには、ほんとうに申し訳ございませんでした。

●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年3回(2・6・10月)発行●

〒177-0035 東京都練馬区南田中 2-7-7 Tel/Fax 03-6767-8808

E-mail: cherno1986@jcom.zaq.ne.jp

◇ウェブサイト http://homepage2.nifty.com/chernobyl_children/index.html

◇事務局ブログ <http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/>

※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。